

A portrait of Angus Deaton, an elderly man with white hair and glasses, wearing a brown suit jacket, a white shirt, a red patterned bow tie, and a beige sweater. He is looking directly at the camera with a slight smile.

# 「大脱出」の達人 *ESCAPE ARTIST*

経済学理論と測定手法、そして、政策と人々の生活。  
これらを結びつけるアプローチを打ち出したアンガス・ディートン教授。  
IMFのピーター・J・ウォーカーが教授の経歴を紹介する。

**ア**ングス・ディートン教授にとって、2015年12月は目まぐるしい月になった。ノーベル経済学賞受賞のためにストックホルムに渡り、スウェーデンのグスタフ国王から同賞を授与された。また、米国における中年層の死亡率に関して共著者のアン・ケース教授と発表した画期的な論文は、格差の問題や所得の低迷に関する一連の議論に世間の関心を向けることになった。

ディートン氏は、米プリンストン大学にある自身の教授室で行われたインタビューで「ノーベル賞を受賞すると報道機関から多大な注目を浴びるので、あれ以上の関心が寄せられることはないと思っていたのですが、実際には、この論文がノーベル賞以上に関心を集めることになったのです。まるで一つの津波が引いているところに、もう一つさらに大きな津波が押し寄せてきたような感じでした」と、大西洋の両側のアクセントも混じる軽いスコットランド訛りで語った。

この論文で、ディートン氏は、優れた経済学者であり、プリンストン大学の同僚でもあるアン・ケース氏と共に、驚くべき発見を発表した。米国の白人中年層の死亡率は数十年にわたる改善の後に、1990年代後半から横ばい、または上昇に転じていたのだ。主な原因は、自殺とアルコールやオピオイド系鎮痛剤などの薬物の乱用と見られる。夫婦であるケース氏とディートン氏が米国人ノーベル賞受賞者の祝賀会でオバマ大統領に挨拶をした際に、ディートン氏がケース氏を紹介しようとする、オバマ大統領は「ケース博士のことは存じています。お二人の論文についてお話ししましょう」と言葉を挟んだ。

「21世紀の米国における非ヒスパニック系白人中年層の罹患率と死亡率の上昇 (Rising Morbidity and Mortality in Midlife among White Non-Hispanic Americans in the 21st Century)」と題されたこの論文はオピオイド蔓延という問題の核心に迫るもので、こうした薬物乱用が公衆衛生上の問題にとどまらず、経済的な危機であると主張している。「依存症を解消しても、それでこの危機を脱せる訳ではありません。なぜなら、さらに根の深い問題があるからです。高卒の資格しか持っていない人々の実質賃金は、過去50年間にわたり低下しているのです」とディートン氏は指摘する。

ノーベル賞受賞とこの論文の発表により二重に巻き起こされた旋風は、公衆衛生や貧困、消費、貯蓄など様々な分野にわたって意義のある研究を幅広く行い、多くの論文を発表してきたディートン教授の学者としての経歴を決定づけるものだった。

「ディートン氏は、得意とする定量的な分析の手法を使い、経済学や他分野で驚くほど広範囲のテーマを対象に研究を行ってきました」と、プリンストン大学の経済学者オーレイ・アシェンフェルター教授は言う。「今、十分な知識を持たない人々が意見を強硬に主張し、そうした意見が次第に政治勢力としての力を得ています。こうした時代だからこそ、証拠を思慮深く使い、データ分析を慎重に行うディートン氏の手法の重要性は益々、高まっているので

はないでしょうか」ともアシェンフェルター教授は述べた。

ディートン氏の人生が幕を開けたのは、今日とは大きく異なる時代だった。1950年代に同氏が育ったのはスコットランドのエディンバラだが、彼はこの地のことを「当時はなかなか暗い場所でした」と形容している。幼少時には、インドなど遠方の地を舞台にした本を読むことに彼は楽しみを見い出していた。また、同氏は屋外も好きで、メドウズパークに何度も行き、そこで午後を遊んで過ごしたという。メドウズパークは広々とした公園で、ディートン氏が生まれる数日前に終結した第二次世界大戦の最中には「勝利のために耕せ」という奨励の下に貸出菜園として用いられていた土地が、再び公園として利用され始めたばかりだった。

## 学者としてのスタートは 順風満帆ではなかった。 時には進展がないと感じ、 苛立ちを覚えました。

ディートン氏は9歳の時に家族と共にイングランドとスコットランドの境界線に近い小さい村に居を移したが、そこで地元の学校に通い、先生たちの注目を浴びることになった。これは彼の両親を大いに喜ばせた。とりわけ息子の教育に熱心に力添えしたのが父親だった。ディートン氏の父親は高校への進学がかなわなかったものの、後に夜間部に通い土木技師になった人であった。その後、ディートン氏は13歳の時に名門私立校フェテス・カレッジへの入学を認められた。その年には、経済的に困難な状況にある生徒が二人入学したが、ディートン氏もその一人として奨学金を授かった。遠いように見えた父親の夢は現実のものとなったのだ。

フェテス・カレッジでは生徒による自主的な学習が奨励されたが、これはディートン氏に適した方針であり、学ぶことが彼の趣味になった。またディートン氏は、他の学生と同じように同校の英海軍学生連隊に入隊して夏は海上で過ごし、初めての海外渡航先となった仏ブルターニュでは、「みんなで陸に上がり、安い赤ワインを買いました」と語る。

中等教育を終えた後、同氏はケンブリッジ大学に進み、当初は数学を専攻した。しかし、当時の彼にとっては「教え方がひどく下手」に感じられ、間もなく興味を失った。別の分野への転向を考える中で経済学に落ち着いたが、当時は経済学がどういふものか良く分かっていなかった。

しかし、同氏の経済学に対する興味は着実に深まっていた。夏は、大西洋航路定期船のクイーン・エリザベス号とクイーン・メアリー号の船上で、服を売る仕事をしながら、経済学の教科書を読んで過ごした。2週間ごとにニューヨークに着くと、当時は同氏によると「安っぽい食堂ばかり多くてかなり不穏な」地区にあった92番埠頭で下船し、徐々に波止場から外に出てマンハッタンを探

索するようになった。

こうして目にした厳しい現実を巡って、ケンブリッジに戻った学生たちは活発な議論を行った。「あの頃、私たちはみんな左寄りの新聞を読み、革命を志して活動していたものです。革命のための活動が何を意味していたかは別にして。その中身は大抵、お酒を飲みながらカードゲームを楽しんで過ごすことだったのです」とディートン氏は語る。

ディートン氏は、1967年にケンブリッジを卒業してイングランド銀行で短期間、勤務した後、博士号の取得と研究助手の仕事のため、また、彼の最初の妻となったメアリー・アン・バーンサイド氏との生活のために、ケンブリッジに戻った。夫妻は近くの村に住居を構えて、レベッカとアダムという二児を得た。

仕事の面では、ディートン氏は、後にノーベル賞を受賞することになるリチャード・ストーン氏という良き師を得て、経済学の基盤である貯蓄と需要に関する分析を共同で行った。経済の本質を見抜く力は初期にも発揮されており、彼は高インフレを経験していた1970年代のイギリスでコーヒーの購入をためらった自らの経験を用いて、想定外のインフレは、世間一般の常識に反して、貯蓄の減少ではなく増加を助長する可能性があるとの主張を打ち出した。その後に出された政府発表では、この説の予測どおりに家計貯蓄が増加していたことから、この見解に懐疑的であった人々が驚く結果となった。

ディートン氏は際立つ存在ではあったが、学者としてのスタートは必ずしも順風満帆ではなく、時には進展がないと感じ、苛立ちを覚えることもあった。そのような状況にあったのは彼だけではなかった。ディートン氏のテニス仲間、後にイングランド銀行総裁を務めることになるマーヴィン・キング氏がいたが、二人はどちらも教授になれていない落胆を共有し、交友を深めた。とは言え、これは時期尚早な話でもあった。当時、両氏はどちらも30歳にもなっていないかったのだ。

転機は1975年に訪れ、ディートン氏はブリストル大学の計量経済学教授に就任した。不幸にも数か月前に妻のメアリー・アンを亡くしたばかりのディートン氏は、公私の

事情で変化を求めたのだ。

ブリストル大学では、ロンドン大学バークベック・カレッジのジョン・ミュエルバウアー氏との共同研究により、「ほぼ理想形に近い需要理論体系(Almost Ideal Demand System)」と称されるモデルを考案した。このモデルは、その「ほぼ理想形」との名のとおり、完璧なものとして提示された訳ではないが、それまでの試みに比べて、消費者行動の全体像をより完全に、かつ、実際に即した形で把握できるものだった。このモデルの有用性の中でも特筆すべきものとして、例えば税制変更などの政策が、異なる所得層や人口層にどのような影響を及ぼしうるかをより正確に予測可能な点が挙げられる。後にノーベル委員会は、「35年たった今日でも、このモデルは、集計データ、個人データ、家計データのいずれかが用いられるかにかかわらず、世界各国で需要推計の基盤を成すものとして利用されている」と評した。

ディートン氏は1979～80学年度の研究休暇中にプリンストン大学に滞在し、同大学の研究資源の豊富さと知的レベルの高さに感銘を受けた。同氏はその後1983年に同大学に移籍することになる。研究休暇中の唯一の問題は、プリンストン大学から支給される給与が「9ヶ月分しかなかったため、夏を利用して何かする必要がある」とことだった。ディートン氏は、世界銀行で、初期段階にあった生活水準指標調査に携わることになった。この調査は、途上国での政策が社会的な結果にどのような影響を及ぼすかを把握することを目的としていた。ディートン氏は同調査の発展に尽力し、特に家計調査の開発に大きく貢献した。

同氏のキャリアが進むにつれて、家計調査は彼の功績のうちで最も影響力のあるものの一つとして数えられることになった。ディートン氏は、消費状況を観測し、出生コホートを分析し、また、ローカルな市場価格を推計することで、現場の実情をより正確に示すために、家計調査を用いて分析を行う手法を先駆けて開発した。同氏は、仕事の大半を、幼少期に抱いた憧憬が再燃した滞在先のインドで行った。

## 健康と賃金

アン・ケース氏とアンガス・ディートン氏は、共著の論文「21世紀の米国における非ヒスパニック系白人中年層の罹患率と死亡率の上昇(Rising Morbidity and Mortality in Midlife among White Non-Hispanic Americans in the 21st Century)」(2015年)で、オピオイド蔓延の問題の重大性について、エイズ危機の問題に照らし合わせて鋭い考察を行った。

両氏の調査によると、45～54歳の非ヒスパニック系白人層における死亡率は、1999～2013年の間、毎年0.5%のペースで上昇した。その前は20年間にわたり低下していたにもかかわらずだ。このように死亡率が再上昇した主な要因は薬物やアルコールの乱用と自殺であり、特に高卒以下の層で顕著だったとされる。心身の健康障害の報告も著しく増え、罹患率も上昇した。対照的に、米国の他の人口層や他の先進国における死亡率は低下し続けていた。

憂慮すべきこのような傾向の根底にあるものは何なのか。ケー

ス氏とディートン氏は次の可能性を提示する。オピオイド系鎮痛剤は化学的に合成されたアヘンで、1990年後半に広く利用可能になったが、これは死亡率と罹患率が上昇した時期にほぼ重なる。また、経済的不安も要因の一つとして挙げられる可能性がある。貧しい白人中年層は、アメリカで賃金の中央値が伸び悩んでいることに伴う打撃がとりわけ大きく、確定給付型年金から確定拠出型年金への移行によって、金融リスクが被雇用者に移転した影響も強く受けているためだ。ケース氏とディートン氏は、この蔓延を抑えることができなければ、「ロストジェネレーション」が生まれる可能性がある」と警鐘を鳴らす。

続編として2017年に発表された論文の「21世紀における死亡率と罹患率(Mortality and Morbidity in the 21st Century)」では、「この傾向は2015年中も継続した」と報告されている。

1980年代から90年代にかけて、ディートン氏は、消費分析の分野で画期的発見をさらに重ね、個人レベルの消費行動と総消費との間に整合性を持たせる必要性を示してきた。同氏はまた、消費の時系列データがどのように変化するかを分析し、「ディートン・パラドックス」を打ち出したが、これは標準的な代表的個人モデルによる恒常所得仮説には理論内部に矛盾があるというものだ。なぜならば、平均的な所得者の消費行動を時系列で追うと、所得が一時的に減ったり増えたりすれば、それに応じて消費がさらに大幅に減ったり増えたりしており、消費の変動幅が一時的な所得の変動幅よりも小さくなるべきという恒常所得仮説の想定と矛盾しているからである。

ディートン氏はまたこの時期に開発経済学への関与を深め、例えば、貧困の罫と呼ばれる説についても提言した。栄養が不足すると十分な収入を得ることができずに貧困から抜け出せないとする、広く受け入れられていた説を疑問視したのだ。ディートン氏は、コーネル大学のシャンカー・サブ라마ニアン氏と共に、インドでの調査に基づき、十分な食事を摂取するために必要な費用は日給のわずか5%であることを示し、栄養不良は貧困の原因ではなく結果であると結論づけた。

またディートン氏は、2013年に出版された著書『大脱出—健康、お金、格差の起源』の中で、開発援助は害を及ぼしようとの主張を展開した。開発援助を受けた被援助国の政府は、自国民よりも援助国に対する説明責任を重んじるためだ。その結果、政府と市民との間の社会契約関係が弱まり、公的制度の強化や持続可能な発展に必要な改革を行うインセンティブが低下する。「貧しい人々のために何かするべきだというのは、強力な主張であるように見えますが、実はそうではありません。貧しい人々を苦しめることは避けたいと思われていますが、実際にはその逆のことが起こっているのです」とディートン氏は述べる。

このような主張は、議論を呼ぶものだった。貧困問題に取り組む英国オックスファムのダンカン・グリーン氏は、同団体のブログで「看護師や教師が働き、予防接種が行われ、人々の命が救われています。目に見える形で、具体的な成果がこれ以外にもたくさん存在します。これと比べると、長期的に社会制度が損なわれるというこの主張は、不確実な証拠に基づく曖昧なものです」と述べた。また、開発援助の提供のされ方が問題なのだとする声も上がり、議論は続いている。

また、世界各国の貧困と健康問題はこの70年間で大きく改善されたとする同書の論旨に関する議論もある。同書には、「このような進歩はグローバル化なしには不可能だったのではないかと述べられている。ディートン氏によると、問題はグローバル化にあるのではなく、「勝者が、後に続くとうとする者から機会を奪ってしまう」ことで、それが企業の利潤追求や医療制度の不備、賃金の停滞を引き起こすような粗雑な公共政策につながる。この主張は部分的に、2017年にケース氏とディートン氏により発表された「21世紀における死亡率と罹患率(Mortality and



経済学者のアンガス・ディートン氏は、開発援助は害を及ぼしようとの提言をする。

Morbidity in the 21st Century) 」と題された論文の中でも提言されている。

ディートン氏とケース氏はプリンストン大学で知り合った。二人は1997年に結婚し、今日では隣同士の教授室で仕事に取り組む。ディートン氏によると、同僚との結婚は数多くの喜びと大きな幸せをもたらしたが、それに伴う問題もあり、解決策を二人はまだ見つけられずにいるようだ。「私たちは各地で講演などを依頼されることが多いのですが、私が講演活動を行い、他方で妻のアンが講義で忙しいと、落ち着いて二人で仕事をするのが難しいのです」とディートン氏は認める。貴重な余暇の時間には、二人はフライフィッシングや料理、旅行を楽しむ。

ノーベル賞と死亡率に関する論文発表の騒ぎから1年がたった2016年12月、ディートン氏はロンドンでケース氏と息子のアダムと共にタクシーに乗り込み、運転手に行き先はバッキンガム宮殿だと告げた。運転手は、一行が旅行者なのか、あるいは王室の招待客なのか疑問に思ったのか、「ご用向きは何ですか」と聞いた。これに対し、息子のアダムは、「お父さんが発明した新式のトイレットパーパー・ホルダーが女王陛下のお気に召したのさ」と冗談を飛ばした。宮殿に着くと、ディートン氏は、ケンブリッジ公ウィリアム王子によって騎士爵に叙された。

卿の称号を得たアンガス・ディートン氏はこれについて「学術研究の世界に対する、素晴らしい贈り物でした」と語り、「その上、女王陛下の戦いに騎士として馳せ参じるために、馬や甲冑や槍を見つけられないといけない場合と比べると、よっぽど楽しいです」とも付け加えた。FD

ピーター・J・ウォーカーは、IMFコミュニケーション局のシニア・コミュニケーション・オフィサー。